

主日礼拝説教「向こう岸に渡ろう！」

日本基督教団石神井教会 2018年2月11日

【旧約聖書日課】ヨナ書 1章1節～2章1節

1主の言葉がアマタイの子ヨナに臨んだ。2「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。」

3しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッフアに下ると、折よくタルシシュ行き船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようとして、タルシシュに向かった。

4主は大風を海に向かって放たれたので、海は大荒れとなり、船は今にも砕けんばかりとなった。5船乗りたちは恐怖に陥り、それぞれ自分の神に助けを求めて叫びをあげ、積み荷を海に投げ捨て、船を少しでも軽くしようとした。しかし、ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすり寝込んでいた。6船長はヨナのところにきて言った。「寝ているとは何事か。さあ、起きてあなたの神を呼べ。神が気づいて助けてくれるかもしれない。」

7さて、人々は互いに言った。「さあ、くじを引こう。誰のせいで、我々にこの災難がふりかかったのか、はっきりさせよう。」そこで、くじを引くとヨナに当たった。8人々は彼に詰め寄って、「さあ、話してくれ。この災難が我々にふりかかったのは、誰のせいだ。あなたは何の仕事で行くのか。どこから来たのか。国はどこで、どの民族の出身なのか」と言った。

9ヨナは彼らに言った。「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。」

10人々は非常に恐れ、ヨナに言った。「なんという事をしたのだ。」人々はヨナが、主の前から逃げて来たことを知った。彼が白状したからである。

11彼らはヨナに言った。「あなたをどうしたら、海が静まるのだろうか。」海は荒れる一方だった。

12ヨナは彼らに言った。「わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい。そうすれば、海は穏やかになる。わたしのせいで、この大嵐があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている。」13乗組員は船を漕いで陸に戻そうとしたが、できなかった。海がますます荒れて、襲いかかってきたからである。

14ついに、彼らは主に向かって叫んだ。「ああ、主よ、この男の命のゆえに、滅ぼさないでください。無実の者を殺したとあって責めないでください。主よ、すべてはあなたの御心のままなのですから。」

15彼らがヨナの手足を捕らえて海へほうり込むと、荒れ狂っていた海は静まった。16人々は大いに主を恐れ、いけにえをささげ、誓いを立てた。

21さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。

【福音書日課】マルコによる福音書 4章35～41節

35その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。36そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。37激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。38しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。39イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり風になった。

40イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」41弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

「向こう岸」へ！

わたしたちの教会は、次主日、創立 60 周年を祝います。人間で言えば「還暦」ですが、今日に生きるわたしたちの感覚からするならば、それは、人生の終局を迎えるような年齢ではなく、むしろ第二の人生を始める時期というべきかもしれません。石神井教会も、60 年の歩みを重ねてきて、ようやく第二のステージに進み入ろうとしているのです。

今日の福音書は、主イエスの宣教の歩みが新しい段階を迎えようとしていることを物語っているようです。主イエスは、これまで、弟子たちを招かれ、町々を歩いて旅されてきましたが、弟子たちと共に舟に乗られて湖の対岸に渡ろうとなさっているのです。

この場面には、前段があります。主イエスは、この日、湖のほとりに集まって来ていた人々に教えをなさっていました。そのために、もしかすると朝のうちからずっと、舟に乗っていたのです。ご自分と弟子たちだけ舟に乗って岸から少し漕ぎ出し、そこから岸辺に集まる人々に向かって、お語りになられていたのです。そのようなことは、どうも、しばしばあったようです。ところが、この日は、夕方になり人々が解散しても、主イエスは舟から陸に上がろうとなさいませんでした。そのまま、弟子たちと共に、湖を渡っていくことになさったのです。

もともと、主イエスの弟子たちの中に漁師たちがいました。主イエス一行が乗っていた舟も、その漁師たちの舟だったのでしょ。彼らは、湖のことは知り尽くしていました。ときはすでに夕方でしたが、漁をするのも夜半から明け方だったようですから、これから舟を出して向こう岸に渡っていくということは、容易いことだったに違いありません。主イエスが「**向こう岸に渡ろう**」と弟子たちに提案されると、漁師である弟子たちは、「お安い御用で。では、どこまで行きましょうか」と請け負ったことでしょう。

主イエスが彼らにお答えになられた行き先は、今日の場面には描かれていませんが、続く箇所を見ると、目的地が「ゲラサ人の地方」(5:1)であったことが分かります。主イエスは、ガリラヤ湖の真ん中を渡って行った先の町に渡って行こうと、提案なさったのです。

その行き先を聞いた弟子たちは、もしかすると、浮かない顔をしたかもしれません。この船旅はあまり気乗りしない、と思ったかもしれません。そこは、ユダヤ人の彼らにとっては、外国人の町だったからです。そこには、たくさんのギリシア・ローマ風の建物や神殿が建てられていました。そのような町に行ったとしても、主イエスや自分たちが歓迎されるとは、彼らには思えなかったでしょう。行くだけ無駄な、訪ねる価値のない場所。ガリラヤ湖を知り尽くしている彼らは、そう考えたのではないのでしょうか。

主イエスとて、そのような弟子たちの考えることもお分かりだったでしょう。にもかかわらず、主イエスは、「**向こう岸に渡ろう**」と誘われたのです。「こちら側にとどまっていなくて、さあ、向こう側に進み入ろう」。そう呼びかけられる主イエスの気迫に押されるようにして、弟子たちは舟を漕ぎ出したのでしょう。

眠っていても構わない!?

気乗りしないままに動き出したときには、小さな石ころさえ大きな障害に見えるものです。舟を沖へと漕ぎ出した一行にも、思わぬ逆風が吹いてきたのです。激しい突風は波を舟の中にまで及ぼし、水浸しにしてしまうほどでした。舟に乗っていた者たちは皆、転覆してしまわないようにバランスを取りながら、水を掻き出さなければなりません。もちろん、漁師たちにしてみれば、そのような嵐もよくあることだったでしょうが、漁師でない弟子たちも同船していましたから、この嵐に動転してしまった者もあったことでしょう。ただ必死に舟の縁に掴まっているだけの弟子たちの姿を想像させられます。ところが、そのとき、主イエスだけは一人、**艫の方で枕をして眠っておられた**というのです。

主イエスは、もちろん、漁師である弟子たちを信頼していらしたのでしょうか。舟のことを任せておける漁師の弟子たちがいたからこそ、主イエスは、眠っておいでだったのです。それにしても、激しい突風で舟がひっくり返りそうになっているというのに、なお眠り続けていられたとは、主イエスは、どんな神経をしていらしたのでしょうか。どんな状況でも動じない、神経の図太い大物、と言えば聞こえが良さそうですが、必死で舟から転げ出さないようにしがみついていた弟子たちからすれば、ちょっと無神経な人に見えたのではないのでしょうか。「**先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか**」という弟子たちの言葉は、主イエスに対する懇願というよりも、むしろ憤りを匂わせるものです。

もちろん、舟は、波をかぶって水浸しになっているとはいえ、まだ転覆したわけではありません。漁師の弟子たちが完全にお手上げ状態、ということでもなかったでしょう。主イエスは、もしかすると、本当に危なくなったら起き上がろうと、眠ったふりをして様子をうかがっていたのかもしれませんが。そういうこともあるかもしれませんが、主イエスは、むしろ、このとき、意図してご自分の眠っている姿を弟子たちにお示しになろうとされていたのではないのでしょうか。「あなたたちも、わたしの後に続いて、一緒に眠りなさい」と。

弟子たちは皆、主イエスに呼びかけられて、弟子として従って来ていました。主イエスに強いられたわけではなく、自ら従って来ていたのです。だからこそ、「湖を向こう岸まで渡っていこう」と主イエスに提案されたときも、気乗りしないながらも舟を漕ぎ出してきたのです。自分たちが決心して従って来た主イエスが目的地として指し示されたところだからと、自分たちの思いを押し殺して、本当は行く価値がないと思っているところ、未知の新しい領域に、向かおうとしていた。しかし、心の中では、その行き先を拒もうとする思いが渦巻いていた。心穏やかではいられなくなっていた。その弟子たちに、主イエスは、「さあ、舟のことは漁師たちに任せて、行った先のことはわたしに任せて、あなたたちも一緒に眠りなさい」と、誘われていらしたのではないのでしょうか。

どんなときにも眠れるというのは、本当に信頼すべき者を知っていて、安心して自分を明け渡し、委ねる術を知っていてこそでしょう。主イエスは、弟子たちの舟で眠られたのです。わたしたちを、そのような舟に誘われているのです。

静まりの中へ

教会は、舟にたとえられます。主イエスが弟子たちと共に乗られた舟です。その舟で、主イエスが、わたしたちを眠りに誘ってくださっている。ですから、わたしは大真面目に言いますが、教会の集まりや礼拝で居眠りできる方は、主イエスに倣われていらっしゃるのです。主イエスのように、本当に信頼をもってその場に自分の身を委ねて、心を明け渡していらっしゃるのでしょうか。主イエスが、漁師の弟子たちを信頼してご自身を委ねられたように、いいえ、究極には、そのようにして神を信頼してご自身を委ねられていらしたように、わたしたちは、神の御前に共に集うときにこそ、主イエスのように眠ることができるはずなのです。

もっとも、わたしたちの眠りは、同じ眠りでも、主イエスのような眠りではなく、旧約聖書に物語られていたような預言者ヨナの眠りに近いことがあるかもしれません。

ヨナも、大嵐の中、一人、船底で居眠りをしていました。その様子は、主イエスとよく似ています。もちろん、ヨナは神を知っている預言者でした。「**海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者**」と自称することさえしています。理屈で言うならば、彼も、神の絶対的な御力を知っていたのです。そうであればこそ、嵐の中でも動揺することなく居眠りを続けられたのがヨナだった、ということでしょうか。どうも、ヨナの眠りは、そのような眠りとは違ったようです。ヨナは、むしろ、神から逃れようとして眠っていたのです。神の御手の御業を見ないで済ませようとして、あるいは神の御言葉を聞かずに済ませようとして、彼は、船底に潜り込み、眠っていたのです。いいえ、むしろ、ヨナは、神の御業も知っていて、神の御言葉も知っていて、しかし、神の指し示されるところに行くことを拒んで逃げ回っている自分自身の穏やかならざる心を見まいとして、眠り込もうとしていたのかもしれない。

だからこそ、ヨナは、船乗りたちにたたき起こされたとき、神の御心と自分の考えが衝突していることを語らないではいられませんでした。自ら、海に放り込まれることを願い出ないわけにはいきませんでした。舟から放り出されてしまえば、海の底に沈み、永遠の眠りに就き、神の御心からも、自分の思いからも、逃れられると考えたのでしょうか。

主イエスも、このヨナの物語をご存じでした。ヨナの眠りもご存じでした。その上で、主イエスは、まるでこのヨナの真似をするように、弟子たちの舟で眠られたのです。主イエスは、ヨナのような眠りをさえ、ご自分の眠りと同じものに変えてくださろうとなさったのではないのでしょうか。穏やかならざる者の心を、「**黙れ、静まれ**」と静めてくださろうとなされたのではないのでしょうか。

主イエスは、わたしたちの行くべき先を指し示されます、「**向こう岸に渡ろう**」と。その道行きを、わたしたちは、がむしゃらに進み行くことはないのです。眠りさえ許される交わりの中で、黙して静まることのできる平穩を与えられながら、一つの舟に乗り合わせて行くのです。ここに主イエスがいらっしゃいます。この眠られる主が、命を賭して、わたしたちを生かしてくださっているのです。